

超高齢社会における T 字杖のあり方

1130413 今尾 知哉

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

高齢者の生活をより便利にするために、福祉用具の存在は欠かせない。現在、日本は超高齢社会である。歩道を歩けば容易に高齢者と出くわすことができる。一方で外出用の歩行補助用具として一般的な、T 字杖を使って歩行をしている高齢者の人数は意外と少ないことに気がついた。そして、ひょっとすると高齢者の多くは T 字杖の必要性を感じていないのではないかという疑問を感じた。そこでまず高齢者にとっての T 字杖の必要性を明確化する研究を始めた。その結果、T 字杖はちょっとした支えでしかなく、自立歩行ができる高齢者の多くは T 字杖を必要としておらず、また自立歩行ができない高齢者にとっては T 字杖では身体のバランス補助の役割が不足していることがわかった。そこで、高齢者の生活をより便利にするために、今後の T 字杖のあり方について提案した。

2. 背景

以前は老年期を衰退の時期ととらえる考え方が一般的であったが、今や老年期は人生の約 4 分の 1 を占める長さになり、老年期をよりよく生きること（サクセスフル・エイジング）が個人的にも社会的にも大きな課題となっている。

老年期の生活を支えている歩行補助用具に T 字杖がある。誰でも、いつまでも若くありたいと思うものであるが、加齢とともに、特にけがや病気がなくても、立ったときや歩いているときのバランスが悪くなる。筋力も低下してくるために、一度バランスを崩すと転倒しやすくなる。また、長距離や長時間の歩行も困難になってくる。そのようなとき、T 字杖を使って、歩く機能を補うことで、歩くのが楽になり、歩行距離を延ばすことや歩行速度を速めることができ、今まで家の中で閉じこもりがちだった人も、外に出るのが楽しみになる。

一方で T 字杖は、支点が一点しかないので、身体のバランスの補助という役割においては他の歩行補助用具（多脚杖、ロフトランド杖、四輪歩行車、シルバーカー）と比べて劣っている。このことがこの杖の機能的な魅力に大きな影響を与えている。

3. 目的

本研究は、T 字杖の必要性を調査し、それを基に、高齢者の生活をより便利にするための、今後の T 字杖のあり方についての提案を行う。

4. 研究方法

本研究は、はじめに、T 字杖の要素やその使用者の特徴を整理し、T 字杖の必要性の問題について分析した。そのために 65 歳以上の高齢者（T 字杖の使用は問わない）を対象にインタビュー調査を行った。また、高齢者の目線になって問題に直面するため、福祉用具専門相談員の資格の講座で疑似的な高齢者体験を行い、T 字杖の使用者の置かれている状況について追及した。そしてそれらの情報を基に、使用者の求める魅力に関する意識構造モデルを体系化した。最後に、T 字杖の魅力に関する意識構造モデルから、高齢者の生活をより便利にするための、T 字杖特有の魅力的な機能について分析し、特有な魅力の追加が T 字杖使用者の拡大の鍵になると考え、インターネットやテレビ番組の情報を参考にして、今後の T 字杖のあり方についての検討を行った。

5. 調査研究内容および結果

5.1 T 字杖と他の歩行補助用具の違いについて

T 字杖の機能的特徴として支点が一点であることが挙げられる。この杖の使用対象者は、歩けるが安定性と耐久性に欠ける人であり、自立歩行できる人向けである。このことから T 字杖は介護保険に対応していない。他の移動補助用具として、多脚杖やロフトランド杖、四輪歩行車、シルバーカーがある。これらは支えという機能においては T 字杖より優れている。また、シルバーカー以外は介護保険にも対応している（シルバーカーは自立歩行できる人向けである）。このことから、支えを必要としている高齢者は、必ずしも T 字杖を選択する必要性はないと考えられる。

5.2 T 字杖の使用と必要性に関する意識調査結果

近所への移動を（自動車や自転車ではなく）徒歩移動で行なっている 65 歳以上の男女を対象に、T 字杖の使用と必要性についてのヒアリング調査（男性 13 名、女性 17 名）を高知県香美市内の「あけぼの街道」で実施した。また、福祉用具専門相談員の資格の講座で疑似的な高齢者体験を行い、T 字杖の必要性について追及した。

5.2.1 T 字杖の使用と必要性

ヒアリング調査の結果、あけぼの街道で T 字杖を使用して歩行している高齢者の人数は 30 名中 1 名だけであった。また、T 字杖の必要性を感じているかという問いに関しては、多くの人が必要性を感じていないと答えた。その結果、自立歩行のできる高齢者の多くは T 字杖の必要性を感じておらず、購入するに至っていないこ

とが分かった。

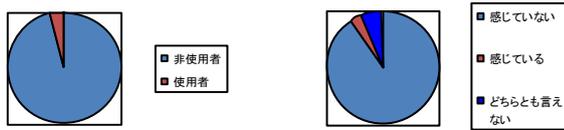


図 5-2 T 字杖の使用と必要性に関する意識調査結果

5.3 疑似高齢者体験と理学療法に基づいた杖の必要性

疑似的な高齢者体験のため、手足におもりを装着し、膝はほとんど曲がらないように固定した。そしてゴーグルを装着し、低い視力を再現した。体験の結果、自立歩行はできるものの階段の上り下りはゆっくりでないとできない状況になり、T 字杖もあったほうが便利であるように感じられた。しかし、理学療法士（リハビリの先生）曰く、自立歩行のできる高齢者は、あまり福祉用具に頼らないほうが身体の寿命を延ばすことができるそうだ。

5.4 T 字杖の魅力に関する意識調査結果

私生活で T 字杖を使用している男女を対象に、杖の魅力に関するヒアリング調査（男性 1 名、女性 4 名）を病院で実施した。

5.4.1 T 字杖使用者からの視点

一方で T 字杖の使用者は、支えとしての T 字杖の機能性以外に、他の歩行補助用具にはない魅力として、おしゃれや電車やバスなどの公共交通機関での携帯性を挙げた。また、T 字杖のちょっとした補助は長距離歩行時にはちょうど良いと話した。T 字杖は、長距離歩行時のバランス補助や身体のバランス補助以外の役割において、他の移動補助用具にはない魅力が存在する様である。

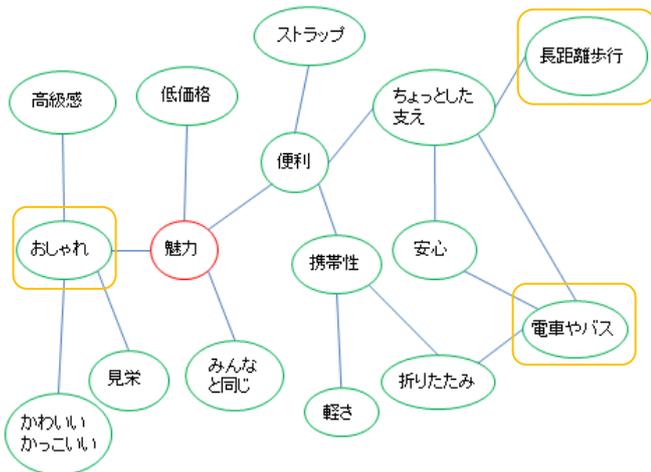


図 5-4 T 字杖の魅力に関する意識構造モデル

5.5 T 字杖の必要性のまとめ

T 字杖は身体のバランス補助という役割においては、必ずしも必要であるとは言えない。なぜならば、T 字杖の支点は一点であり、バランス補助の安定性は低く、自立歩行のできる人を対象にしているからである。しかし、そういった人たちの多くは、T 字杖に必要性を感じていない。また、理学療法によれば自立歩行のできる人は、

できるかぎり福祉用具に頼らないほうが身体の寿命を延ばすことができる。一方で、おしゃれや携帯性、長距離歩行など他の歩行補助用具にはない T 字杖特有の魅力も存在する。このような魅力が現状の T 字杖では少なすぎるのが、T 字杖を必要としていない人が多い理由と考えられる。

6 対策と提案

上記したように、T 字杖は身体のバランス補助という役割においては、必ずしも必要であるとは言いきれなかった。そこで高齢者に必要性を感じてもらうためには、ちょっとした支えとしてのバランス補助機能以外に機能を追加し、付加価値を加え、他の歩行補助用具にはない T 字杖としての魅力を追加すること提案する。

今日、インターネットやテレビ番組では LED ライト機能や立ち上がり補助機能といった、バランス補助機能以外の機能が付いた杖が注目を集めている。一方で、高齢者の多くはこういった杖の存在を認識していない。それは、こういった杖が活躍する状況は限られており、売る側も積極的に宣伝できないという理由もある。高齢者にこういった杖を使用してもらうためには、便利と思われる必要な場面を想像させ、こういった杖もあることを知ってもらう機会が必要である。そのためには店舗での売り方の改善も欠かせない。消費者の求めている機能を店舗で対応できればより便利な杖が生まれやすい。機能性に伴う付加価値の追加と、それに伴う売り方の改善が、今後の超高齢社会における T 字杖のあり方ではなかろうか。

7 今後の課題

・杖専門店の普及

高知県には杖専門店がなく、全国的に見ても杖専門店は少ない。消費者の杖購入経路は、病院やネット通販が主である。しかしこの市場構造では、杖の発展・進化には期待できない。

・老人保護施設における情報発信態勢の拡充

今回ある老人保護施設にヒアリング調査の協力をお願いしたところ多忙により断られてしまった。杖がより魅力的になるためには施設が積極的に情報発信する姿勢が必要である。

参考文献・参考資料

- [1] 福祉用具専門相談員研修用テキスト 一般社団法人シルバーサービス復興会 編集 H24.5.20 発行
- [2] 消費者行動論体系 田中洋 中央経済社 H22.10.5 発行
- [3] 産経新聞 H22.10.7 発行
- [4] ステッキ・杖の専門店 つえ屋 京都 H25.1.6 閲覧 <http://www.tsueya.net/>
- [5] 株式会社 TMC ブレインズ H25.1.6 閲覧 <http://tmc-brains.com/>
- [6] NHK 「ルソンの壺」 H25.1.6 放送